

# 知求会ニュース

2015年9月

第55号

## ◎ 掲載記事紹介

1. UU now37号(平成27年7月20日発行)5面に、「地域社会をデザインするコミュニティデザイン学科 教員からのメッセージ」の内容で、**中村祐司**先生のメッセージが掲載されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow37.pdf>
2. UU now37号(平成27年7月20日発行)11面に、「Welcome to 研究室&ゼミ」コーナーで、**倪永茂研究室**の記事に**倪永茂**先生・**胡祥林**さん((国際社会研究専攻2年)・**蔡百恵**さん((国際社会研究専攻2年)・**霍達**さん(国際社会研究専攻1年)のコメントが掲載されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow37.pdf>

## ◎ 国際学部だより

1. 日本経済新聞 朝刊(平成27年7月3日発行)31面に、「宇都宮市長と宇都宮大生 昼食会で意見交換 今後も定期開催」と題して、主催者の**菅野翼**さん(国際学部4年)のコメントが掲載されました。
2. 日本経済新聞 朝刊(平成27年7月18日発行)40面文化欄に、「卒業生・元教授のメモや日記」と題して、「大学、近現代史研究に活用 文書館整備寄贈増える」の内容で**吉葉恭行**さん(国際社会学科・第1期生)らの記事が掲載されました。
3. 朝日新聞 朝刊(平成27年6月12日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「県内も40校 子らを支えよう」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
4. 朝日新聞 朝刊(平成27年6月19日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「縦書きのわけは筆ペンで」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
5. 朝日新聞 朝刊(平成27年6月26日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「「書く力」時に厳しく指導」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
6. 朝日新聞 朝刊(平成27年7月3日発行)24面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「定期試験「学習言語」の壁」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
7. 朝日新聞 朝刊(平成27年7月10日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「学級担任の関わりが鍵」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
8. 朝日新聞 朝刊(平成27年7月17日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「もう会えない彼 忘れない」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
9. 朝日新聞 朝刊(平成27年7月31日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」

と題して、「たった一人をみんなで支援」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。

10. 朝日新聞 朝刊(平成27年8月7日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「高校でも支援を続けたい」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
11. 朝日新聞 朝刊(平成27年8月14日発行)28面に、新コラム「とちぎの風 日本語教室」と題して、「みんな違くと認め合おう」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。

## ○刊行案内

1. **吉葉恭行**さん(国際社会学科・第1期生)が、2015(平成27)年2月23日に『戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程』(東北大学出版会)を刊行しました。現職は秋田工業高等専門学校教授です。<http://www.tups.jp/book/book.php?id=326>
2. 宇都宮大学国際学部国際学叢書第6巻として、**鎌田美千子**先生が2015年(平成27)年2月23日に、日本語教育学の新潮流10『第二言語によるパラフレーズと日本語教育』(ココ出版)を刊行しました。  
([http://www.cocopb.com/cocobooks/booksinfo/%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%BC/2015/2/23\\_978-4-904595-56-5.html](http://www.cocopb.com/cocobooks/booksinfo/%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%BC/2015/2/23_978-4-904595-56-5.html))
3. 宇都宮大学国際学部国際学叢書第7巻として、**古村学**先生が2015年(平成27)年4月1日に、『離島エコツーリズムの社会学 隠岐・西表・小笠原・南大東の日常生活から』(吉田書店)を刊行しました。<http://www.yoshidapublishing.com/booksdetail/pg658.html>

これまでの国際学叢書は以下の通りです。

- 第1巻 『混迷する国際社会と共生へのビジョン』2004年  
『移動・都市・翻訳』2004年
- 第2巻 『冷戦後国連安全保障体制と文民の保護 多主体間主義による規範的秩序の模索』  
(日本経済評論社) **清水奈名子** 2011年3月
- 第3巻 『オーマンの国史の誕生—オーマン人と英植民地官僚によるオーマン史表象』  
(御茶の水書房) **松尾昌樹** 2013年3月
- 第4巻 『地域のグローバル化にどのように向き合うか—外国人児童生徒教育問題を中心に—』  
(下野新聞社) **田巻松雄** 2014年4月11日
- 第5巻 『平安期日本語の主体表現と客体表現』  
(ひつじ書房) **高山道代** 2014年3月13日

**研究室訪問 44** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第44号は国際社会交流研究講座所属の**栗原俊輔**先生にお願いしました。

「紅茶を通じた宇都宮と世界のつながり」

栗原 俊輔

2014年4月に宇都宮大学国際学部に着任いたしました。担当している科目はグローバルガバナンス論などです。一言では説明しにくい分野ですが、グローバル社会における世界での格差や貧困などを主に途上国と先進国のつながりの中での事例や、日本国内での格差などを取り上げながら、人間の安全保障と社会正義という2つの大きな視点を中心に据えて、これらの様々な問題を、具体的な問題分析手法を用いて解決策を探ります。

前職は国際NGOそしてJICAという実務分野で、米国や途上国に長く住んでおりました。そのため社会に出てから20年以上が海外であったため（スリランカ約13年、アメリカ約6年、東チモール、カンボジア等々）、日本の社会常識と微妙にずれているところがあるらしく、たまに学生に指摘されます。しかし、多分これからもずっとずれている気がします。もう手遅れでしょう（笑）。

国際NGOではプロジェクト・マネージメントを長年担当し、欧米で国際開発に用いられるLogical Framework (LogFrame)や組織分析などを授業でも使い、様々な問題の発見方法や分析手法などを紹介し、授業でも身近な例を題材に学生たちに実践してもらっています。具体的には、世界の貧困、特に途上国における絶対貧困が日本など先進国による影響もあるのであれば、何が問題なのか、また私たちがファーストファッションと呼ばれる格安の洋服を買うことによる、生産者側の途上国の人々にどのような影響があるのか、私たちはどのようにそれを解決できるのかなどを取り上げています。

日本人の学生はいろいろとアイデアはあるように感じますが、それをクラスで皆の前で発表することに対して緊張しているようなところもあって微笑ましいですが、もっと自由な発想ができるような環境、そしてそれをクラスで共有できる雰囲気を作るよう努力しています。学生のレポートなどを読んでみても、世界や日本国内の格差の是正には、私たちの意識変革が重要であると訴えて終わっているものが散見されます。そのため、そこからさらにもう一步踏み込んだ、具体的にどのようにしたら私の意識が変わるのか、どうしたらそれが実現可能なのか、具体的に答えを求められるような授業を心がけています。

私の研究のテーマは「紅茶を通じた日本人消費者と世界のつながり」です。恥ずかしながら着任するまで知らなかったのですが、宇都宮市は紅茶消費量の高い地域で、毎年上位に入っています。前任地がスリランカであり、しかもスリランカ名産のセイロンティーを生産している紅茶プランテーション農園の居住労働者への支援をずっと行ってきていたため、これは何かの運命かと本当に驚きました。

スリランカの紅茶プランテーション農園は、イギリス植民地時代にスリランカ人のためではなく、イギリス人の富と食のために、もともと住んでいたスリランカ人農民と農地、そして未開の森林を切り開いて作られました。戦後独立したスリランカでも、このプランテーション制度による紅茶栽培が続いています。経営者はスリランカ人になったものの、いまだに最高級茶はスリランカ国内では飲めず、全て輸出にまわされます。

農園住民の生活環境は植民地時代とほとんど変わらず、特に最近では選択肢の欠如が問題として認識され始め、行政の非介入、教育の機会の少なさ、そして実質的に職業選択の

自由がない状況を改善すべく、NGO や国連なども支援をしています。しかし、スリランカ経済を揺るがす変革はスリランカ政府も望まず、経済と社会変革の両立が求められるという非常に困難な状況にあります。

セイロンティーをご存知ない方は多分いらっしゃらないと思いますが、世界最高級茶でもあるセイロンティーは、日本に輸入される紅茶の実に 6 割以上を占めます。宇都宮の紅茶消費量が全国上位ということを見ると、宇都宮はそれだけセイロンティーとつながりがあるとも言えます。しかし、生産者が置かれている状況を知っている宇都宮市民は皆無です。

そんな中、紅茶好きの宇都宮市民が集まって結成された「紅茶の薫るまち推進委員会」という市民団体と協力し、オリオン通りの宮カフェにおいて「セイロンティーに向こう側に見えるもの」という講演会を行いました。生産者であるスリランカの農園の人々について、もっと知ってもらい、宇都宮市民とスリランカの紅茶農園の人々が直接結び付くことによって、市民同士だから出来る国際協力や、地域密着型・地域活性化を行う宇都宮市内の NPO による、住民レベルの情報発信の仕方などをスリランカの紅茶農園にも伝えていけるような、そしてスリランカからも多くを学べるようなつながりを構築していければと思っています。

(2015 年 08 月 23 日原稿受理)

**博士録 32** 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 32 回は今春修了された松金研究室 OB の[今井淳雄](#)さんにお願ひしました。

## 「中国・台湾における「市民社会」に関する研究 —「官民連動」という視角から—

今井 淳雄

### 1. 博士論文要旨

本論文では、「市民社会」が中国にも構築されつつあるのか、という中国の民間非営利組織研究において主要な論点となっている課題に着目し、中国の NPO 研究者による先行研究を整理した。その上で、サラモンやハーバーマスの定義に準拠する「市民社会」

(西洋型市民社会) が中国に構築されつつあると主張する立場が中心だった中国の NPO 研究者の唱える「市民社会」論に対し、溝口雄三が唱えた「官民連動」の空間を公共空間概念と捉えた上で「中国的市民社会」と仮定し、中国と台湾の実際の民間非営利組織によって、それがいかに継承され、また、そこにどのような断絶があるのか、連続性と非連続性という視角から検討を進め、その連続性の存在について明らかにした。

序章では、先行研究の整理を踏まえ、研究の背景と目的、方法を示すとともに「市民社会」概念の整理を行った。第 1 章では、中国の NPO 研究者が中国国内外の民間非営利組織の歴史をどのように捉え、いかなる組織を民間非営利組織として理解しているのかにつ

いて整理した。そしてそれは、欧米で考えられている民間非営利組織の範疇とどのような差異があるのか明らかにした。また、近年、中国において「市民社会」の担い手として注目されている「草の根組織」に関する中国の NPO 研究者の研究について検討し、中国に「西洋型市民社会」が構築されつつあるとまではいえないと結論づけた。その上で、溝口雄三による「官民連動」の空間という概念が、「西洋型市民社会」とは異なる「中国的市民社会」という公共空間概念として捉えることができる可能性があることを提起した。第 2 章では、台湾の民間非営利組織の歴史・制度を整理した。その上で、第 3、4 章では、台湾の仏教系民間非営利組織である慈濟会（財団法人中華民国仏教慈濟慈善事業基金会）及び仏光山（国際仏光会）の国内外の慈善事業、特に東日本大震災支援の事例から、「官民連動」の空間の形態について考察した。その結果、慈濟会、仏光会ともに慈善事業を展開する上で、政府機関と自らをつなぐ紐帯としての「民」の存在が確認できた。そして、「官民連動」の空間は、台湾のみならず海外にも拡張される空間であることを示した。第 5 章では、中国本土における基金会の歴史、現状及び法的位置づけ、非公募基金会の概念について整理した。その上で、第 6 章では、仏教系民間非営利組織である仁愛会（北京市仁愛慈善基金会）の慈善事業の事例から「官民連動」の空間の形態について分析を進めた。その結果、仁愛会の場合は、龍泉寺の住職であり、かつ全国政治協商会議常務委員である学誠が、政府機関と仁愛会の紐帯となっていることを明らかにした。以上の考察から、取り上げた仏教系民間非営利組織には、以下の 3 つの共通点があると整理した。

- (1) 各種慈善事業を展開するにあたり、政府の政策路線に合わせた形で事業展開を行い、協調路線を採用する。
- (2) 政府機関とは、必要に応じて協力関係を構築する。その際、「民」たる民間非営利組織と「官」たる政府機関との間は、政治家等の「官」と「民」の両方の立場を有する者が紐帯となり、両者を結び付ける。
- (3) 国外で慈善活動を展開する際も、「官」と「民」を結ぶ紐帯者を見つけ、現地の政府機関と連携を図ろうとする。その上で、これらの共通点が「官民連動」の空間、すなわち「中国的市民社会」の重要な特徴であると指摘した。そして最後に、「官民連動」の空間という視角が、現代の中国で展開する民間非営利組織を分析・研究する上で有効なものであると結論づけた。

## 2. 後輩への助言

後輩、特に社会人院生に対して以下 3 点僭越ですが助言させていただきます。

- (1) 指導教員の指導・助言に真摯に耳を傾けること。博士後期課程に進まれる方は、すでに自らの研究分野について一定の知識を有しています。また、社会人院生であればそれに加えて社会的に一定の地位を得ている場合があります。そうすると、自分の研究の視点や進め方に執着してしまい、指導教員の指導・助言を受け入れられなくなることがあります。また、研究の視点はよくても、種々の要因（時間的、地理的、政治的要因等）により実証できない研究課題を立ててしまうことがあります。指導教員は、このような状況を見抜いて指導・助言をされています。真摯に耳を傾けましょう。また、社会人院生の場合は、

日々の仕事が忙しく直接指導教員と会って指導を受けることがなかなか難しいと思います。しかし、直接会ってコミュニケーションを図ることでしか気付けないことがたくさんあります。直接指導教員とコミュニケーションを取るよう努めましょう。

(2) 学会には積極的に参加すること。社会人院生の場合、大学に通うだけでも大変だと思います。しかし、学会は、最新の研究動向をつかむことができるだけでなく、発表した場合には、多分野の研究者から質問を受けることで、新たな視点を獲得できる貴重な場です。また、学会の懇親会の場では、研究者としてのネットワークを広げることができる絶好の機会です。このような場では、普段、話すことができない他大学の先生からも助言をいただくことができます。さらに、研究者としての今後のキャリア形成において重要な役割を果たす場合があります。日々の仕事で大変だとは思いますが、積極的に参加しましょう。

(3) 仕事は辞めないこと。私は、社会人院生として入学後、諸事情により2度転職しました。私の場合、幸いにも無職にならずに済んだため、学費の支払いが滞ることはありませんでしたが、仮に社会人院生が無職になった場合、研究の継続が難しくなることは言うまでもありません。また博士号取得者が多くなった今日、課程修了後、必ず大学教員の職が得られるとは限りません。その場合、会社等で働くことになるわけですが、職歴が必要であることは当然のこと、その継続性も重要となってきます。さらに、今日の大学教員は教育、研究能力だけでなく、事務処理能力も求められます。社会人院生の方はくれぐれも仕事を辞めてはいけません。

### 3. 謝辞

最後に、本研究の遂行にあたっては、多くの方々からご指導、ご助言、ご協力をいただきました。特に、6年の長きにわたってご指導いただきました主指導教員の松金公正先生、副指導教員の佐々木史郎先生、重田康博先生、前副指導教員の高際澄雄先生には、論文の執筆になくてはならない貴重なご意見、ご指導をいただきました。ここに改めて深く御礼申し上げます。

2009年に社会人院生として入学し、十分な研究・調査の時間が確保できない中で、主指導教員の松金先生には、公私にわたり懇切丁寧にご指導いただきました。このことは、一大学教員となった今日の私の根幹となっています。松金研究室での6年間がなければ今日の私が存在しないことは言うまでもありません。

(2015年08月27日原稿受理)

**知究人 28** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は、国際学部研究生 OG のバタール ウンダラルさんをお願いしました。

#### 「充実した大学院生活」

バタール ウンダラル

はじめまして、バータル ウンダラルと申します。私はモンゴル出身で、2011 年に来日しました。2015 年 3 月に一橋大学大学院商学研究科経営学修士コースを修了し、現在は新社会人として、充実感を持って働いています。

2011 年に来日した際は、宇都宮大学に研究生として入学し、「外国語学習方法」について研究していました。以前より関心を持っていた分野であり、非常に興味深く研究することができました。言語学に対する探究心は深まっていたのですが、新たに経営学を学びたいという思いが強まり、2013 年に一橋大学の MBA に進学しました。

入学してからは、言語の壁をはじめとして、日本社会における組織の仕組みなど、理解するのに努力を要することが少なくありませんでした。当時は社会経験がなかったため、理解が難しい部分もあったと思います。それでも、企業の第一線で働く社会人の方々と、同級生として共に講義を受け、議論しながら学んだことが、何より貴重な経験となりました。MBA では、一つの研究に特化せず、経営に必要な様々な知識や理論を身につけることが目的となります。そのため、他の大学院とは異なり、初年度は必須科目を全て取得し、2 年目から各ワークショップ（ゼミ）に配属され、より詳細な知識を身につけるために研究を行います。カリキュラムには、財務会計学、組織学、経営戦力、マーケティングなど経営学の科目はもちろんのこと、グローバル化が進む今の時代に必要な、異文化コミュニケーションに特化した科目も含まれています。世界各国からきた留学生と、その国のビジネス文化について議論することができ、とても勉強になりました。といっても楽しいことばかりではありませんでした。全科目においてほぼ毎週、課題提出およびグループワークが必須であったため、毎日終電で帰ることが当たり前になっていました。

2 年目からは、経営戦略、マーケティング、財務会計、金融など 7 つのワークショップに分かれました。私は「数字は嘘をつかない。財産をどのようにコントロールし、運用するかが企業においてもとても大事だ。」と考え、財務会計ワークショップに入りました。研究テーマは「無借金経営を行う企業のコーポレートガバナンス特徴」です。なぜ日本では無借金企業が多いのか、その背景を、コーポレートガバナンスの面から分析しました。市場に存在するすべての企業にとって、資金をどのように調達し、それをどのように効率よく運用するかは、重要な問題です。理論からすると一般的に企業は、調達にかかる資本コストを低くし、節税効果など資金調達のメリットがある方法（負債活用）を選ぶように努力します。しかし、市場にはそのメリットを受けようとしない無借金企業が多数存在することに疑問を持ち、研究対象としました。研究方法は、全上場企業からスクリーニング条件を満たした上場 2139 社の 2004 年～2013 年の年次財務データ（サンプルサイズは 289830 個数）を使って、回帰分析を行いました。その結果、外国人持株比率、持合株式比率、経営者の過去の所属や資金繰り悪化経験、社外取締役の規模の大きさなどのガバナンス状況が、無借金経営を行うことに影響を与えると証明できました。

大学院の2年間は非常に実りの多く、達成感がある期間でした。今後、学んだことを仕事に行かせたらと思います。

(2015年08月20日原稿受理)

**海外だより 22** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は寄稿者がいませんので未掲載になります。

**海外留学今昔 14** 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

### 「私の韓国留学体験記」 2014年8月末～2015年6月

国際社会学科4年 豊田 祥子

「変に壁を作らず、誰とでも話せるようになる!!」私が韓国へ留学に行く前に決めた自分の中での目標です。今回は韓国の慶北大学校での私の留学体験をお話したいと思いません。

慶北大学校への留学を決めたのは、ヨーロッパやアメリカ、東南アジア等、様々な国から留学生が来ており、色々な人たちと交流が出来ること、留学生同士の会話はほとんど英語、そして多くの授業が英語で開講されていたため、英語の勉強になると考えたからです。そして最も大きかった理由が、本当の韓国人はどんな人たちであるのか少しでも知りたかったからです。日本にいと韓国についての様々な話を耳にします。それらを鵜呑みにしてしまう人もいますが、私はその国へ行き、本当のことを少しでも分かりたいと思い、留学を決意しました。しかし、そのような決意はあったものの、実は第二外国語で朝鮮語ではなくフランス語を受講していたため、最初は「何で韓国へ留学に行くの？」と質問されることも多々ありました。しかし前述したように自分の中で疑問に思っていた点を自分の目で確かめるべく、そして目標を達成するために韓国へ行きました。

韓国へ行ってから最初のうちはハングルがやっと読み書き出来る程度だったため、普通に生活することすら難しく、また英語も拙かったため、留学生とコミュニケーションを取ることすら難しい状況でした。初めの2か月は「留学頑張るぞ!」という空元気のおかげでなんとか部屋に引きこもってしまうこともなく生活できていました。留學生活が始まって2か月がたちだんだん慣れ始めると「なんで私はみんなと比べて英語が全然話せないのだろう...。私が留学に来た目的って何だろう。」と考えることが多くなり、疲れも出ていたせいか、友達から誘いがあっても断ってしまうということが多くなりました。そして部屋に引きこもりがちになってしまったのです。しかし、留學生活で一番仲良くなった韓国人や中国人の友達が懲りずに私を外に誘い出してくれたおかげで、その状況からは脱出できました。そこからは、自分の目標にあったように、授業や集まりの中で、最初から

人に壁を作らず、話しかけにいけるようになり、その結果、世界各地に友達ことができました。また韓国人の友達とは、「韓国と日本の歴史」について話す機会も持てました。今までは日本側が発信している情報しか知らなかった私ですが、その友達との会話によって韓国人はどう思っているのかということが少しでも知ることができたと思います。また韓国人は面倒見のいい人がとても多く、何においても助けてくれました。このような友人たちのおかげで私は約1年間の留学を楽しく過ごすことができたと思っています。また、留学前まではないに等しかった韓国語能力でしたが、帰国前には韓国語能力検定の3級を取得、また韓国人の友達とは日常会話ができるようまでになりました。この留学は帰国直前に「帰りたくない」と思ったほど、精神面、勉強面、様々な面において充実したものとなりました。就職活動が終了したら真っ先に韓国へ遊びに行きたいと思っています。まだまだ書きたいことはたくさんありますが、この辺で失礼いたします！拙い文章ですが、少しでも私の留学生生活を垣間見ることができたならば幸いです。

(国際学部 国際社会学科 第17期在学学生)

(2015年08月14日原稿受理)

## 「一生ものの出会い」

大島 有沙

韓国の<sup>インチョン</sup>仁川空港に降り立ったあの日から早一年。時経つ速度に驚かされるとともに、私の留学生活は一生忘れることのできない思い出となりました。私は2014年の9月より一年間、交換留学生として韓国のソウルにある<sup>サンミョン</sup>祥明大学校で学ばせていただきました。

もともと韓国について関心がなかったわけではありませんが、だからと言って特別、韓国に留学したいという思いが強かったわけでもありませんでした。一年半、宇都宮大学で学業に励みながら日韓関係や韓国の歴史についてもっと学びたいと思うようになったのです。宇都宮大学では多くの友人にも恵まれ、もっと大学で学びたいという気持ちもありましたが、留学に行く決めてからはせっかく一年間留学するのだから普通に大学に通うだけでは味わえないことを絶対に感じてこようという思いで留学生生活をスタートさせました。

ですが、隣の国、韓国だとはいえ、言語も文化も違う国で暮らすわけですから。最初はいかにうまくいかないことばかりでした。大学で一年間学んだだけの韓国語能力では到底、大学の授業についていけるわけもなく、日常会話さえも苦勞するほどでした。何をやるにも人の助けが必要でした。学びたいことはあるのにそれを学ぶだけの実力と時間がないことに焦り苛立ち、自分の目標を見失いそうになったことも少なくありません。

しかし、今思えばそのような環境が自分を大きく成長させてくれたようにも感じます。最初のころは何でも自分でなんとかしなければいけないと思っていた私でしたが、それではいけないと思わせてくれたのは韓国で出会った友人たちです。つらい時、大変な時は人の力を借りてもよいのだと思います。それに気付いてからは肩の荷がすっとおり、留学生

活を純粹に楽しんで送れるようになりました。その時から韓国語も一気に伸びたように思います。大切なのは無理しすぎずに、ワクワクながら最後までやり続けるということなのではないかと思えます。

今、そんな友人たちに出会えたことが何よりも自分の糧となり、韓国語を勉強する新たな理由になっているようにも感じます。韓国という国に対しても好き、嫌いを超えた感情を持つようになりました。もし私が宇都宮大学に入学していなければ、もし私がある時に韓国に留学していなければ、出会えなかった友人、経験できなかったことが数多くあると思うときに、すべてがつながって今、自分らしく頑張れているのだなと感じます。

最後に、私の留学を支えてくださった方々へ心から感謝するとともに、これから留学を考えている方の助けに少しでもなれば幸いに思います。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

(国際学部 国際社会学科 第18期在学学生)

(2015年08月29日原稿受理)

**学生サロン 10** 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**キャリア指南 12** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**フォーラム** 2015年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は侃研究室OBの**若林信克**さんをお願いしました。

## 「歴史を学ぶこと」

若林 信克

2015年に国際社会研究専攻を修了しました若林です。修了して半年たった今、あらためて大学院で学んだことを振り返ってみたいと思います。

私は1951年に生まれ、日本の高度経済成長期に入社し、Japan as No.1、バブル、失われた20年の時代を経験してきました。入社当時は、みんなが豊かになっていく実感することができました。しかし、退職時の会社は、厳しい国際競争にさらされ、利益だけを追求する、余裕のない職場になっていました。定年退職後、広い視野で社会を見てみたいと思い、大学院に入学しました。大学院の授業は新鮮でした。なぜ中国はニクソン訪中を受け入れたのか。なぜイランのパーレビ権威主義体制は崩壊したのか。コソボへの人道的介入

は認められるのか。なぜルース・ベネディクトはフィールドワークせずに『菊と刀』が書けたのか。などなど。政治とは、文化とは、歴史とは何かを深く考えさせられました。

そんな授業の中で紹介された印象深い教材があります。Simon & Garfunkel の“7 O' Clock News / Silent Night” (1966) という曲です。そこでは、彼らが歌う 'Silent Night' のバックに、7 時のニュースが流れます。公民権法案に関する審議、キング牧師のデモ、ベトナム反戦運動などが淡々と続いていきます。日常生活の中に、意識しないと見逃すような事件が流れていきます。E.H.カーは『歴史とは何か』の中で、単なる事実が歴史的事実になるのは、歴史家による事実の選択と整理が必要であると述べています。この曲は、日常の現実を歴史的事実として認識できない、そんな状況を鋭く描いていました。会社での私はこんな状態でした。日々の忙しさに追われ、ベトナム戦争、冷戦終結、湾岸戦争、9.11、3.11 などは、時間とともに通り過ぎていくだけでした。そんな私が大学院で学んだことは、歴史とは単なる事実の繋がりではなく、連鎖する歴史的事実を、因果関係で解釈するものであるということ。過去に発生した事件が複雑に関連し合って、現在があり未来につながるということ。そして、因果関係の解釈には、さまざまな解釈があり得るということでした。

今年は戦後 70 年になります。カーは「歴史が過去と未来との間に一貫した関係を打ち立てる時にのみ、歴史は意味と客観性を持つことになる」と述べています。私の世代は、この 70 年の大半を現在進行形の形で生きてきました。今、私は、親の世代から引き継ぎ、また実際に経験した貴重な体験を、選択し整理し、解釈し直して、次の世代に伝えていきたいと思っています。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 15 期修了生)

(2015 年 08 月 20 日原稿受理)

## 特別寄稿

### 「国際学部同窓会懇親会報告」

国際学部同窓会理事 志村なぎさ

同窓会では、2015 年 5 月 2 日(土)に福島市にて同窓会理事会および学部先生方との意見交換会を行い、その後懇親会を開催しました。大学からは田巻学部長、佐々木一隆先生、中村真先生、田巻事務局長が参加され、現在の国際学部の状況についてうかがい、同窓会として協力できることについて、いろいろお話しすることができました。

この意見交換会では、主に宇都宮大学にて昨年度より実施されている国際インターンシップへの助成について話し合われました。大学ではグローバル人材育成のために企業への国際インターンシップを積極的に推進すると同時に、渡航費の助成を行っています。ただし、助成の対象になるのは企業であり、NGO や NPO は対象外になります。国際学部の学生には NGO や NPO へのインターンを希望する学生も少なからず存在することから、こうした学生の渡航費を同窓会に助成してほしいという内容でした。

この件に関して結論を先取りしますと、理事会によるその後の継続審議を経て7月31日の東京理事会にて正式に国際インターンシップへの助成が決定いたしました。

さて福島理事会・懇親会に話を戻しますと、翌5月3日には、丹治副会長の案内で、福島市内および相馬市を中心とした沿岸地域の被災地状況を見学してまいりました。震災から4年を経て倒壊した建物の撤去・再建、損傷を受けた道路などのインフラ整備は進んでいましたが、震災の傷跡はいまだ大きく、言葉を失うばかりでした。

海岸線を歩いた際に、「震災直後より、何にもなくなってしまった今の方がつらい」とおっしゃった丹治副会長の言葉が今も耳に残っています。幼少期に海水浴のためによく訪れていたようで、「ここにシャワーがあって、ここにトイレがあったんだよね。なんにもないや」と非常に寂しそうにおっしゃっていました。

丹治副会長のように、ふるさとの原風景が失われてしまった震災地域の方々の心中は察するに余りあります。震災の傷跡と復興の過程は、ぜひ多くの方々に見ていただきたいと思います。そうして皆で情報や思いを共有することが、今後に繋がっていくのではないかと考えます。

さらに、7月31日には東京・品川にて理事会および懇親会を開催しました。懇親会には、田巻先生をはじめ田崎事務長や吉葉会長など9名の皆さんにお集まりいただきました。お仕事都合などで参加できなかった方々もいらっしや、人数は少なかったですが、お天気にも恵まれ、終始和やかな会となりました。

次回の東京懇親会は12月5日(土)または6日(日)に上野または東京にて開催予定です。詳細は同窓会ホームページおよびフェイスブックにてアナウンスいたします。皆様のご参加をお待ちしております。

(2015年08月18日原稿受理)

## EU支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の15号の内容は、1イタリア女性看護師、38人の患者を殺害 理由は「気に入らない」から? 2 EU支部だより「寝屋川」です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

## 編集者のひとりごと

●平成27年8月28日に、宇都宮大学新学部「地域デザイン科学部」の募集パンフレットが大学HPに掲載されました。

詳細は [http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/regional\\_design\\_gb.pdf](http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/regional_design_gb.pdf) をご覧ください。

●国際キャリア開発プログラムの一つである「国際キャリア開発」が2015(平成27)年8月29日から31日まで、合宿セミナーが開催されました。その中で、国際学部卒業生の成田由

香子さん(国際社会学科第2期生)が国際協力・国際貢献のC分科会で講師を務めました。講義題目は、「国際協力 NGO の役割、NGO で働くということ。あなたにとって心を動かす仕事とは？」でした。現職は、認定 NPO 法人 ACE (エース) 子ども支援事業チーフ インド・プロジェクト・マネージャーです。

●成田由香子さんの活躍は以前から知っていました。知求会ニュースの「キャリア指南」コーナーへの投稿をお願いしてきましたが、改めて次回の投稿をお願いする絶好の機会と思っています。

●去る7月30日午後に東京へ、研究調査に出掛けました。最初の訪問先は湯島にある文化庁国立近現代建築資料館です。展覧会名は「ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」で、その弟子とは坂倉準三(1901-69)・前川國男(1905-86)・吉阪隆正(1917-80)の3氏です。

●吉阪隆正先生と弟子の渡邊洋治(1923-1983)先生は、編集者が大学4年の時にチャンディガール建築研修旅行でお世話になった方々でした。チャンディガールはル・コルビュジエが手がけたインドの都市計画された都市です。展覧会で一番目についてしたのは、吉阪先生の日記でした。この研修旅行でどのような記述がなされたのか興味がつきないところです。

●2番目の訪問先は、木場にある東京都現代美術館です。展覧会名は「オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男」です。日伯外交樹立120周年記念として開催されました。オスカー・ニーマイヤー(1907-2012)とル・コルビュジエ(1887-1965)はブラジルの首都であるブラジリアの建設で協働しています。また、ブラジリアの建設前には、1952年にアメリカ・ニューヨークにある国際連合本部ビルでル・コルビュジエを含めた設計委員会で協働していました。この通称・国連ビルは国際学に携わる身にとっては象徴的な場ではないでしょうか。

●二日目の7月31日午前、早稲田大学會津八一記念博物館の没後50年「写真家としてのル・コルビュジエ」展を見学しました。ちなみに、早稲田大学は吉阪先生が教鞭をとった大学でした。その後、乃木坂・銀座・京橋のデザインギャラリーを回って、最後は目黒区美術館の「村野藤吾の建築 模型が語る豊饒な世界」展を見学してきました。その夜は、品川で開催された国際学部同窓会の懇親会に合流しました。志村理事の報告にあるように、懇親会は少数でしたが、楽しいひと時を過ごし宇都宮に最終電車で帰宅しました。

---

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** [chikyukai@freeml.com](mailto:chikyukai@freeml.com)

---